

19 深い学びを視点とした授業改善の実践

**こんな実践**

「あきランド」づくりに取り組む場面で、児童が繰り返し対象に働きかけることにより、身近な生活に関する見方・考え方を生かし、実感を伴って追究していく姿を目指した実践です。

実践学校 A 小学校

実践学年 2 学年

実践時期 10 月上旬 単元名「あきランド」

学習指導要領との関連：内容（4）（6）（8）

○休み時間に校庭北側の立木の中で、数人で始めた秘密基地作り遊びが学級の中へ広がり、自分たちのお気に入りの場所にしたいという思いを深めながら取り組みました。2 学期になり、学校でどんぐりを見つけ始めた子どもたちは、去年行った「どんぐりまつり」をパワーアップさせようと「あきランド」を作り、1 年生を招待したいと願うようになりました。

○ダンボールのお城に1 年生を招待したいと願った A 児は、お城を綺麗に飾り付けようと、折り紙を壁に開けた窓に貼りつけました。たっぷりとのりを折り紙に付ける姿から、取れないようにしっかりと貼り付けたいという思いが伝わってきます。窓枠に赤い折り紙をしっかりと貼り付けた A 児（左写真）は満足そうな笑顔を見せました。



そこへ、同じくお城を作りたいと願い活動していた B 児が近寄ってきました。そして、A 児が貼った赤い折り紙を見て「それじゃ、1 年生が中から見えないよ」と話しかけました。窓の内側からは赤い折り紙ではなく、裏面の白しか見えないという B 児の言葉を受けて、A 児はお城の外側や内側から見比べ（右写真）、両方から綺麗な色が見えるように、折り紙を2 枚貼り合わせ、外からも中からも赤色が見えるように作業を進める姿が見られました。



○壁に折り紙を貼り終えた A 児は、違う場所の壁に少しずつ穴を開け、大きくしています。それを見ていた B 児が「どうしてどんどん大きくしていくの」と不思議そうに訪ねます。



A 児は「景品があるから、1年生によく見えるようにしているの」と答えました。壁に開けた穴がこれでよいか確かめるために、A 児は穴の中に自分の頭を入れ、見え方を確かめ始めました (左写真)。

壁の穴を広げては、これでよいか頭を入れて試してみることを繰り返す A 児。すっぽりと自分の頭が入るようになると、おもむろに景品が入ったダンボールの箱を取りに行き、穴の中に差し込んでいきました。

繰り返し試すことで、1年生が景品見えるかな、どうかなと思いをめぐらせながら、創造的に壁の穴を広げていった A 児。この繰り返し試すという学習過程での思考を通して、対象を自らに引き寄せていったことがうかがえます。



ここがポイント!

- ・幼児期の遊びの中で自然と育んできた「比べる」「試す」といった、身近な生活に関わる見方・考え方を生かせるよう、繰り返し対象と関わる場を設定することが大切です。
- ・他にも、「見つける」「たとえる」「見通す」「工夫する」などの学習場面を、意図的に設定していくことが大切です。

まとめ

- ・「比べる」「試す」といった身近な生活に関わる見方・考え方を生かしながら取り組む活動を通して、自らとの関わりの中で対象との対話を深めていきます。さらには、対象の特徴やよさに目を向け、気付きの質を高めることで、他者理解や自己の取組への達成感といった資質・能力の育成にもつながっていきます。